

## 入選

テーマ1..医療と福祉、わたしの体験  
「家族の最後の願い」

埼玉県・本庄東高等学校2年 稲山巧

昨年十二月、僕の父はがんで亡くなった。その一年前に診断を受けた時には既に病巣が大きく広がり、手術で取り去ることが不可能な状態だった。化学療法によって一時的に進行は食い止められたが、その後がん細胞は容赦なく体じゅうに転移していった。父と母は医師と相談を重ね、化学療法を終わりにして在宅での緩和ケアに移行することを決断した。積極的治療の道を断った父が強く望んだのは「できる限り家族と一緒に過ごしたい」そのただ一つだった。母と僕も同じ思いで、父を支えていくことを決意した。

母は病院の相談支援員の勧めで父の要介護認定を申請した。介護保険においては、末期がんを含む十六種類の病気が特定疾病に定められている。四十歳以上でそれらの病気によって要介護状態になった場合に限り、六十五歳以上の人と同様の介護サービスを利用できる。十月半ばに要介護認定通知が届くとすぐにケアマネージャーに訪問してもらい、父の現状と家族と過ごす時間を大切にしたいという思いを伝え、ケアマネージャーのSさんは、父が少しでも自宅で快適に過ごせるよう福祉用具のレンタルを提案してくれた。その日の夕方には介護ベッドが一階の客間に設置され、父はリクライニングを調節しながら無邪気に喜んでいた。積極的治療をしないと決めて、いつもどこか無念さを漂わせていた父が久しぶりに見せる屈託のない笑顔だった。

Sさんは父が通っていた病院の訪問介護ステーションの利用も提案してくれた。週二回の訪問看護の契約を結び、看護師のTさんが父の担当になった。Tさんは治療の副作用でむくんだ父の両足を毎回丁寧にマッサージしてくれた。体中の痛みや不快感で睡眠が浅くなっていった父が、Tさんのマッサージの後では気持ちよさそうにスヤスヤ眠る

のだと、母も嬉しそうだった。主治医による診察は二週間に一回だったが、情報を共有する看護師が週に二回訪問してくれるのは、父だけでなく母と僕にとっても大きな安心感があった。

十一月半ばを過ぎると、父の症状は急激に悪化していった。自力での歩行が困難になり、車椅子のレンタルも開始した。父の不自由が増えると母はSさんに相談し、そのたびにSさんは我が家に駆けつけて、福祉用品や介護サービスの手配をしてくれた。トイレには手すり付き、訪問入浴サービスの利用も始まった。訪問看護は週二回から週三回になった父はTさんのマッサージが楽しみで、訪問を心待ちにしていた。僕には想像もつかない痛みを薬で抑えながら、父は穏やかに自宅で過ごしていた。僕が帰宅すると、母の押す車椅子に乗ってリビングに顔を出し、会話を交わすこともできた。その時の父の笑顔を、僕は今でも昨日のこのように思い出す。

亡くなる約二週間前から、父はだんだんと意識が混濁するようになった。母と僕は父の手を握り、毎日懸命に話しかけた。こちらを見て頷いてくれるだけで嬉しかった。SさんとTさんはほぼ毎日我が家に足を運び、父だけでなく、母と僕も励ましてくれた。「ご家族と一緒にいるときのお父さんは本当に幸せそうだよ。この家で過ごせて嬉しかった気が伝わってくるよ。」という二人の言葉に、母と僕はどれだけ救われただろう。できる限り長く一緒にいたいという僕たち家族の願いを叶えるため、SさんとTさんがタッグを組んで奔走してくれたことを思い出すたびに、僕は心を強く揺さぶられる。医療と福祉とは、対象者だけでなく、その人を大切に思う周りの人々の心にも寄り添うものであるということ。二人が身をもって教えてくれたことを、僕は深く胸に刻んだ。

父の在宅緩和ケアは三ヶ月で幕を閉じた。苦しい思いや葛藤もたくさんあったが、家族で過ごした時間は僕の一生の宝物である。父との思い出、そして僕たち家族を支えてくれた人々への感謝の気持ちを胸に抱いて、これからの人生を悔いなく歩んでいきたい。